

## 琉球語・アイヌ語・日本語諸方言とオーストロネシア語の若干の比較

橋尾 直和

## 1. はじめに

従来の研究において、琉球語・アイヌ語とオーストロネシア語を比較言語学的に考察したものには、村山(1992)・村山(1993)・村山(1995)がある。また、村山(1982)では、琉球語のオーストロネシア語的要素について解明している。琉球語が南島語であるオーストロネシア語と同系である可能性があることは、地理的条件から見て、比較的容易に理解できるが、アイヌ語がオーストロネシア語と同系であると見なす説については懐疑的である、という風潮があったことは事実である。しかし、先行研究、近年の考古学的成果などによって、アイヌ語が琉球語・日本語諸方言と同様にオーストロネシア語と同系である可能性が高まってきた。本論の目的は、その可能性を検証することにある。

筆者は、現在、文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))「琉球・沖縄文化とアイヌ文化の比較研究—ヤマト文化を媒介にして—」(代表者:吉成直樹)に、共同研究者として調査・研究に参加している。その一環として「琉球・アイヌ比較文化研究会」を月1回、法政大学沖縄文化研究所(東京)で開催している。本論は、筆者が2004年10月23日に沖縄文化研究所で口頭発表した「琉球語・アイヌ語・土佐方言とオーストロネシア語の若干の比較—モンゴロイド移動の視点に基づいて—」の内容を基に論文にまとめたものである。

2. 「荷縄」を意味するアイヌ語タル(タ<sub>ラ</sub>)と琉球語ティル(テ<sub>ル</sub>)の比較

村山(1993)において、村山七郎は、アイヌ語 tar「荷縄」の語源をデンプウォルフ(Dempwolff)の再構した PAN(原始オーストロネシア語) \*tali「縄、綱 Schnur, Strick」と見ている。再構の土台は下記の通りである。

## インドネシア語派

タガログ tali=tali' 縄、綱

トバ・バタク

ジャワ

マライ

イガジュ・ダヤク

ホーワ

tadi //

## メラネシア語派

フィージ

tali | a 縄をなう、編む

ndali 縄、綱

サア eli 縄  
ポリネシア語派

トンガ tali | mahaja (縄、つまり、ふたご＝) 走る結び目

サモア tali | sela (縄、つまり掛けるもの＝) 腹帯

村山がこの語源論を展開するに至った理由は、「アイヌ語の語根が単音節である」とする知里真志保、田村すず子らの説に反論するために引用したもので、ここでは、アイヌ語 tar を琉球語・日本語諸方言とは直接比較していない。

下野 (1994) においては、頭がけ背負い運搬具について、アイヌ・ヤマト・琉球・台湾の比較を行い、アイヌのタル (タラ) tar と琉球奄美のティル (テェル) tiru を周囲論的分布と見ている (図 1 参照)。琉球奄美のティル (テェル) に関して、佐々木 (2003) においては、下野 (1980・1989) の丸形箕のと片口箕、ティル式背負籠の分布を引用しながらも、アイヌ・伊豆諸島に広がるティル式背負籠については言及していない。



図 1 頭がけ背負い運搬法の分布 (下野 (1994) : 71 より)



図2 アイヌの頭がけ運搬具タル（タラ）（下野(1994)：50より）

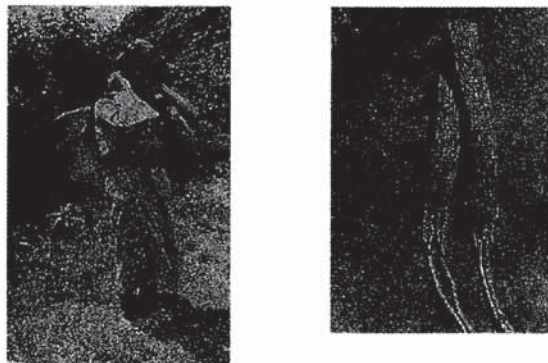


図3 奄美諸島の頭がけ運搬具ティル（テイル）（下野(1994)：56・63より）

筆者は、下野(1994)に述べられているアイヌ・ヤマト・琉球の比較において、アイヌのタル（タラ）tar（図2参照）と琉球奄美のティル（テイル）tiru（図3参照）を圏論的分布としている見解に賛同する。ただし、語源論については異論がある。

それは、下野敏見がティルの語源を南九州で使われるテゴに求め、テゴ>テグ>ティル（テイル）の変化を考えている点にある。筆者は、上記のアイヌ語タル（タラ）tarと琉球語奄美方言のティル（テイル）tiruを圏論的分布と見なしたのであれば、アイヌ語のtarを最古の語形と見るべきであると考え。

村山(1993)に挙げられているオーストロネシア語との関係を考慮すると、以下のような変化をたどって、タル（タラ）tarとティル（テイル）tiruが成立したと考える。

PAN（原始オーストロネシア語）\*tali>\*tal>tar（アイヌ語）



> ter-u > teru > tiru (琉球奄美方言)

南九州方言のテゴは、ter のテ te とカゴ kago のゴ go の混交形 (コンタミネーション) だと考えられる。したがって、筆者はアイヌ語のタル (タラ) tar が出発形と解釈する。

以上のように、琉球語・アイヌ語・日本語諸方言とオーストロネシア語を比較することによって、語源解釈に新しい見解をもたらすことが可能であることが分かる。

### 3. 「虱・虱の卵」を意味する語の比較

村山(1993)において、村山は『知里真志保著作集別巻 I』(103)に「アタマジラミ」として、天塩・美幌・屈斜路・足寄・礼文島で ki があり、服部四郎編『アイヌ語方言辞典』(193-111)「しらみ louse」の項に北海道各方言の ki が「頭虱」として掲載されていることから「頭虱」ki を採用し、この語源を PAN (原始オーストロネシア語) \*kutu' (虱、頭虱) に遡ると見ている。村山説を採用すれば、以下のように解釈できる。

\*kutu' (虱、頭虱) > \*kuti > \*kit > ki (頭虱)

さらに、『知里真志保著作集別巻 I』(102)には、アイヌ語樺太方言「シラミ」タラントマリ rasi (タライカ tasi) とあり、この語源を PAN (原始オーストロネシア語) \*li(n) tá (虱の卵) に遡ると見ている。村山は、以下のように解釈している。

\*li(n) tá > \*lisa > lasi > rasi (虱)

デンプウォルフ (Dempwolff)

原始オーストロネシア語 \*li(n) tá (虱の卵)

ワーム&ウィルソン (Wurm, Wilson)

原始東オセアニア語 \*lisa ~ \*liza (虱の卵)

次に、日本語諸方言に目を向けると、「シラミの卵」として、上記二語の合成語とも言えるキラジ kirazi < \*ki | ra(n) si (石川県)・キラズ (福島県東白川郡、茨城県多賀郡)・キラザ (茨城県那珂郡) が東条操『全国方言辞典』に見える。

村山は、日本語諸方言・琉球諸方言の出発形を \*ki | ra(n) si (虱の卵) < \*ki | la(n) si < \*ki | li(n) sa (< li(n) tá) としている。

『日本方言大辞典』上巻(678)では、「きさじ」として「虱、毛虱、虱の卵」の全国方言の語形が確認できる。ここには、日本語諸方言だけではなく、琉球語諸方言の語形も記されている。ただし、平仮名表記のみで語源は述べられていない。

そこで、音声・音韻表記を施し、上記 \*ki | ra(n) si を出発形として語源解釈を行ったものを以下に掲げる。宮良当壮『再訪南島語彙稿』(No.338)、仲宗根政善『沖縄今帰仁方言辞典』(115)を援用して、『日本方言大辞典』上巻(678)の内容に修正・加筆を施したものを以下に掲げる (j と' は口蓋化、c は破擦音の記号を表す)。

きさじ [kisaʒi] kisazi 【虫幾】 (『日本方言大辞典』上巻: 678)

① 虫、しらみ (虱)。

[kisazi] kisazi < kisansi < \*kiransi 新潟県佐渡  
 [kikazi] kikazi < kirazi < \*kiransi 奈良県宇智郡  
 [g<sup>j</sup>isaŋ] g<sup>j</sup>isaŋ < kisari < \*kirasi 沖縄県石垣島（幼虫）

② 虫、けじらみ（毛虱）。

[kikazi] kikazi < kirazi < \*kiransi 大阪府泉北郡、奈良県  
 [kikaze] kikaze < kiraze < kirazi < \*kiransi 大阪府泉北郡

③ 虱の卵。

○ [kisazi] kisazi < kisansi < \*kiransi 埼玉県秩父郡、東京都南多摩郡、神奈川県津久井郡、新潟県佐渡、石川県金沢市、和歌山県。

（文献例）塵袋一四「しらみの子をきささと云敷きさじと云敷」

[kikafi] kikasi < \*kirasi 徳島県

○ [g<sup>j</sup>i:kafi] g<sup>j</sup>iikasi < kikasi < \*kirasi 沖縄県島尻郡（糸満）

[g<sup>j</sup>i:dʒa] g<sup>j</sup>iiz'a < g<sup>j</sup>iiza < g<sup>j</sup>ee:za < g<sup>j</sup>iaza < kianzi < \*kiransi 鹿児島県徳之島

[kikazi] kikazi < kirazi < \*kiransi 大阪、奈良県宇陀郡「頭にきかじついとる」沖縄県島尻郡

[kigafi] kigasi < kikasi < \*kirasi 島根県隠岐島、徳島市、香川県三豊郡、小豆島、愛媛県、高知県長岡郡

○ [kikaze] kikaze < kikazi < kirazi < \*kiransi 徳島、和歌山県和歌山市、那賀郡、千葉県葛飾郡

○ [kisaza] kisaza < kisazi < kisansi < \*kiransi 常陸、茨城県真壁郡、栃木県、長野県佐久

○ [kisafi] kisas'i < \*kirasi 鹿児島県種子島

（文献例）名語気一八「しらみの卵をきさしとなつく如何。虫幾也、かみしらしらの反は、きささとなる。かみしらせりはきさし也」

○ [kizafi] kizasi < kisazi < kisanzi < \*kiransi 埼玉県秩父郡、石川県能美郡

[kizazi] kizazi < kirazi < \*kiransi 石川県江沼郡・河北郡

○ [g<sup>j</sup>isafi] g<sup>j</sup>isasi < kisasi < \*kirasi 鹿児島県奄美大島

[g<sup>j</sup>isa:fi] g<sup>j</sup>isa:si < kisa:si < kisasi < \*kirasi 沖縄県今帰仁

[kisase] kisase < kisasi < \*kirasi 和歌山県西牟婁郡・日高郡

○ [kisada] kisada < kisaza < kisazi < kisansi < \*kiransi 栃木県上都賀郡、足利市、群馬県山田郡・佐波郡、千葉県東葛飾郡

[kisare] kisare < kisari < \*kirasi 和歌山県

○ [g<sup>j</sup>ifa:fi] g<sup>j</sup>is'aasi < kisasi < \*kirasi 鹿児島県沖永良部郡、沖縄県国頭郡（名護）

[kifa:zi] kis'azi < kisazi < kisansi < \*kiransi 東京都八丈島

○ [g<sup>j</sup>ifa:fi] g<sup>j</sup>is'asi < kisasi < \*kirasi 鹿児島県与論島

[kifa:da] kis'ada < kisada < kisaza < kisazi < kisansi < \*kiransi 山梨県南巨摩郡

○ [k'a:fi] k'aasi < kiasi < \*kirasi 鹿児島県奄美大島（名瀬）



- [ʔkʰa:ʃi] ʔkʰaasi < kiasi < \*kirasi 鹿児島県奄美大島（笠利、大和、小港、住用）
- [kʰasa:] kʰasaa < kiasa < kiasi < \*kirasi 鹿児島県喜界島
- [kiraza] kiraza < kirazi < \*kiransi 茨城県水戸市・那珂郡
- [kīrazi] kirazi < \*kiransi 石川県
- [kīraza] kiraza < kiraza < kirazi < \*kiransi 茨城県
- [kirazu] kirazu < kirazi < \*kiransi 福島県東白川郡、茨城県多賀郡
- [kʰe:sa] kʰeesa < kiasa < kiasi < \*kirasi 沖縄県鳩間島、黒島
- [gʰe:sa] gʰeesa < kʰeesa < kiasa < kiasi < \*kirasi 沖縄県石垣島（四箇）・竹富島
- [gʰi:dza] gʰiiz'a < gʰeeza < kʰeesa < kiasa < kiasi < \*kirasi 鹿児島県徳之島
- [kegafi] kegasi < kekazi < kerazi < kirazi < \*kiransi 兵庫県淡路島、島根県隠岐島、徳島県、香川県、愛媛県、高知県
- [kegase] kegase < kekaze < keraze < kirazi < \*kiransi 岡山県小田郡
- [kerazi] kerazi < kirazi < \*kiransi 石川県
- [dʒitʃafi] z'ic'asi < g'ik'asi < kikasi < \*kirasi 沖縄県首里
- [tʃasa] c'asa < k'asa < kiasa < kiasi < \*kirasi 鹿児島県喜界島
- [tʃafi] c'asi < c'asa < k'asa < kiasa < kiasi < \*kirasi 鹿児島県喜界島
- （補注）③の意の「きささ」[kisasa] kisasa < kisasi < \*kirasi の例。
- 十卷本和名抄一八「虫幾虱 説文云虫幾（音幾 岐佐々）虱子也」
- （○を付している語は、村山が語源解釈を行っているもの。その他は、筆者によるもの。）

これら \*kīra(n)si からの語形の発達は、次のように説明が可能である（変化が見られる箇所アンダーラインを施す）。

\*kīransi > kīrazi（石川県）

第3音節子音 ns > z は、鼻音 n の影響による s の有声化。

\*kīransi > kīrazi > kerazi（石川県）

第1音節母音 i > e は、第2音節母音の影響。

\*kīransi > kīrazi > kerazi > kekazi > kegasi（兵庫県淡路島、島根県隠岐島、徳島県、香川県、愛媛県、高知県）

第2音節子音 r > k は、第1音節子音 k の順行同化。第2音節子音 k > g、z > s は、第2音節子音 k と第3音節子音 z の無声・有声が入れ替わったものと見られる。

\*kīransi > kīrazi > kīraza（茨城県）

第3音節母音 i > a は、第2音節母音 a の順行同化。

\*kīransi > kīrazi > kīrazu（福島県東白川郡、茨城県多賀郡）

第3音節母音 i > u は、東日本の日本語のウが円唇性の強いものでないことを考慮すれば、i が第2音節 a の影響によって u [w] に異化したものと見られる。

\*kīrasi > \*kīsasi（鹿児島県種子島）

第2音節子音 r > s は、第3音節子音 s の逆行同化。

\*kiransi > kisansi > kisazi > kisaza (常陸、茨城県真壁郡、栃木県、長野県佐久)

第3音節母音 i > a は、第2音節母音 a の順行同化。

\*kiransi > kisansi > kisazi > kisaza > kisada (栃木県上都賀郡、足利市、群馬県山田郡・佐波郡、千葉県東葛飾郡)

摩擦音が二つ続くため、第3音節の有声摩擦音 z が異化によって有声破裂音 d になったものと見られる。

\*kirasi > kikasi > g'iikasi (沖縄県島尻郡(糸満))

第2音節子音 r > k は、第1音節子音 k の順行同化。第1音節子音 k->g- については、琉球諸方言においては、k- が g- となる例が多いことから。

たとえば、次のような例がある。

|   | 日本語     | 首里方言             |
|---|---------|------------------|
| 蚊 | ka      | gazan            |
| 烏 | karasu  | garas'i, garasaa |
| 鯨 | kuz'ira | guz'ira          |

また、g' となったのは、後続母音 i の影響で口蓋化したもの(ポリヴァーノフの法則)。

\*kirasi > kiasi > kiasa > k'eesa > g'eesa (沖縄県石垣島(四箇)・竹富島)

第2音節の ra の r が脱落し、第3音節母音 i > a は、第2音節母音 a の順行同化。母音 ia > e の変化があり、長音化したと見られる。第1音節子音 k->g-、g' への変化については、上の例と同じ。

\*kirasi > kikasi > g'ik'asi > z'ic'asi (沖縄県首里)

第2音節子音 r > k は、第1音節子音 k の順行同化。第1音節子音 k->g-、g' への変化については、上の例と同じ。第2音節子音 k > k' は、先行母音 i の影響で口蓋化したもの(ポリヴァーノフの法則)。次いで、g'->z'-、k'>c' に破擦音化した。

日本語のシラミの語源は、アイヌ語ラシ rasi のメタテーゼ sira にミ mi が接続したものと考えられる。ミ mi は、おそらくノミのミと同じく、小動物に付けられたものと解釈できる。

#### 4. 「坐る」「あぐらをかく」を意味する語の比較

村山(1992)では、アイヌ語 rok (坐る) をオーストロネシア語と比較している。知里真志保著作集別巻Ⅱ(223)によると、「すわる(坐る)」の項に、

(1) a (-an) (北海道、カラフト)

(2) rok (-an) (北海道、カラフト)

とあり、(2)は(1)の複数形と解説されている。しかし、村山は、もともと a と rok の二形があり、意味分担がなされるようになったと見なしている。

村山は、この rok をデンプウォルフ(Dempwolff)の再構した原始オーストロネシア語



\**dukduk* (坐る) に遡るとする。

\**dukduk* (坐る) > *rok* (坐る)

デンプウォルフが再構の根拠とする資料は、以下の通りである。

原始オーストロネシア語 \**dukduk* (坐る)

インドネシア語派

タガログ語 *luklok* (坐る)

ジャワ語 *ḍoḍoʔ* (坐る。うずくまる)

マライ語 *duduʔ* (坐る)

ンガジ・ダヤク語 *dudok* (住居を取る)

ホーワ語 *ruru* (眠りに行く)

ポリネシア語派

サモア語 *lolo* (坐る)

村山は、台湾語アミ語の *maróq* も \**dukduk* に遡るものと見なしている。

台湾語アミ語 *maróq* < *ma* | *rok* < \**dukduk* (坐る)

イエルドマン (Gjerdman) は、メラネシアにある ニュー・ヘブリデス諸島のエファテ島に、*loko*、*roko* (かがむ) があり、類似性を示している。他のインドネシア語派・メラネシア語派・ポリネシア語派の *rok* と比較し得る語形は、以下の通りである。

インドネシア語派

タガログ語 *luklok* (坐る)

ジャワ語 *ḍoko* (くずおれる)

マライ語 *duduk* (坐る)

メラネシア語派

フィージ語 *roku* (弓のようにまがった曲げ姿勢)

*dokú* (前の方に身を曲げる)

ポリネシア語派

ハワイ語 *lou* (正しくは *lo'u*) (かがむ)

マオリ語 *roku* (重みで押し下がる)

筆者は、アイヌ語 *rok* と『日本方言大辞典』下巻 (255) に挙げられている「ろくに居 (い) る」 (安座する。あぐらをかく。ひざを崩す。) の「ろく」とが同系であると見なす。村山は、アイヌ語 *rok* と日本語諸方言の比較は行っていない。

ろくに居 (い) る (『日本方言大辞典』下巻 : 2559)



安座する。あぐらをかく。ひざを崩す。関東、信濃、肥後、新潟県岩船郡、長野県佐々。高知県「ろくにおいで下さいませ」

（文献例）狂言・布施無経「ゆるせられい。ろくに居ませう」

〈ろくえる・るくえる〉新潟県岩船郡

〈ろくにおる〉島根県隠岐島、山口県、高知県「膝がすくんだからさきからろくにをる」

〈ろくにする〉山形県庄内、福井県遠敷郡・大飯郡、岐阜県、京都府竹野郡・与謝郡、奈良県宇陀郡「ろくにしとくなはれ」・吉野郡、鳥取県気高郡、島根県「どげぞ（どうぞ）ろくにさっしやえませ」、岡山県苫田郡

〈ろくする〉長崎県壱岐島「ろくして坐れ」、大分県速見郡

〈おろくする〉山形県庄内「おろくさってゆっくりして」

〈ろくかく〉長野県

〈ろくになる〉長野県南佐久郡、大分県日田郡

〈ろくを回す〉高知県高岡郡「さあ、みなろくをまーして十分におあがりつかさいませ」

これらは、原始オーストロネシア語 \**dukduk*（坐る）に遡る可能性が大きい。

原始オーストロネシア語 \**dukduk*（坐る）> *rok* > *rok-u* > *roku-suru*

おそらく、上のような変化過程を経て、「ろく」「ろくする」が生まれたのではないだろうか。

一方、『日本方言大辞典』上巻（1164）には、じょーろく【丈六】として、次のような記述が見られる。

じょーろく【丈六】（『日本方言大辞典』上巻：1164）

（高さ一丈六尺を標準とする仏像の姿から）あぐら。あぐらをかいて座ること。京都近畿中央部、福井や岐阜にかけてジョロカクの類が分布。ジョロはジョーロクの変化形で、ジョーロクは「丈六」、すなわち、丈六の仏像が結跏趺坐の姿であるところから。ジョーロクカクは、近世の文献にも上方のことばとしての記載あり。

この「じょーろく」は、元からあった「ろく」と「高さ一丈六尺」の「丈六」を類推した結果生まれたもので、「ろくする」よりもはるかに新しい語形であることが分かる。

## 5. 「吐く」を意味する語の比較

村山(1992: 78)では、アイヌ語 *atu*（吐く）が原始オーストロネシア語 \**u(n)tah* に遡ると解釈している。また、村山(1993:66-73)では、「吐く」を表すアイヌ語 *atu* と日本語方言 *otaku*「吐く」を比較している。

国立国語研究所『八丈島の言語調査』には、「ヲタキ 吐 17」（17＝『八丈実記』）が挙げられている。他の文献にも、以下の記述が見られる。

東条操編『全国方言辞典』

オタク 吐く。もどす。静岡・長野・岐阜。

オダク 茨城県稲敷郡。

オタキ 嘔吐物。静岡。

エタク 嘔吐をもよおす。山形県米沢・長野県西筑摩郡・岐阜・富山市在・福井県敦賀。

『日本国語大辞典 第二版』第二巻

オタキ 嘔吐物。へど。八丈実記一方言「へどを おたき」伊勢・静岡県志太郡・磐田郡。

村山は、オタクをエタクの古形と見なしている。 otaku > etaku

アイヌ語の記述については、服部四郎においては、凡てのアイヌ方言 'atu 吐く；へどを吐く to vomit, to puke」とあり、知里真志保においては、アイヌ語 atu「へど（反吐・嘔吐）〔をはく〕」at（口をあけて吐く音）+ -u（動詞化語尾）とある。

デンプウォルフ (Dempwolff) が再構した原始オーストロネシア語 \*u(n)tah の土台となった資料は、以下の通りである。

インドネシア語派

|          |                         |      |
|----------|-------------------------|------|
| トバ・バタク   | 'uta                    | 吐くこと |
| ジャワ      | utah= m   utah、w   utah | 〃    |
| マライ      | m   untah               | 〃    |
| ンカジュ・ダヤク | 'uta                    | 吐くこと |

メラネシア語派

|    |        |    |
|----|--------|----|
| サア | m   oa | 吐く |
|----|--------|----|

土田滋は、原始ツォウ語 \*-utaq<sub>2</sub> を立てる。再構築の根拠となったフェレル (Ferrell) の台湾諸語の資料を以下に掲げる。

| 言語名           | 「吐く」の語形   |
|---------------|-----------|
| Squlic Atayal | m   utaq  |
| Favorlang     | m   ota   |
| Thao          | m   ú:taq |
| Pazeh         | m   uta'  |
| Saisiat       | m   ota'  |
| Paiwan        | m   ú:taq |
| Puyuma        | m   u:taq |
| Ami           | ma   ótaq |



アイヌ語 atu (吐く) < atuh < \*u(n)tah

これと同系の語に「えずく（嘔吐する）」がある。『日本方言大辞典』上巻（322）には、次の記述が見られる。

(動) 吐き気を催す。嘔吐する。

(文献例) 易林本節用集 「嘔 エヅク」〈えつく〉新潟県、〈えずつ〉鹿児島県、〈え  
ーずがる〉新潟県佐渡

筆者は、日本語諸方言はすべて原始オーストロネシア語を出発形と見なすことが可能であると解釈する。

> e(n) ta > e(n) ta-ku エタク

> e<sup>n</sup>du-ku エンドック

本論では、琉球語とアイヌ語の周囲論的分布の解釈、琉球語・アイヌ語・日本諸方言とオーストロネシア語を比較することにより、語形変化の過程を探ることができることを検証してきた。

筆者は、これまでに、土佐方言と日本諸方言による比較において、根源的な存在動詞アル *aru* を内包する可能助動詞サル *saru* の存在を、ミッシング・リンクであった西日本方言の中でも土佐の山間部の方言において発見した。アル *aru* の連用形アリ *ari* については、原

始オーストロネシア語 \*yariŋ「現れる、明日、類似」との関連性が考えられる<sup>3</sup>。

また、土佐方言におけるヒセクル hise-kuru のヒセ hise「泣き叫ぶ」がアイヌ語へセ hese「息をする、息」と同系と見られ、原始オーストロネシア語 \*hat'əŋ、\*ət'əŋ「大息（をする）」に遡るものと見られる。これらの語源解釈については、他稿に譲りたい。

今後の課題としては、琉球語とアイヌ語を結ぶ linker とも言える、土佐方言、伊豆諸島方言を始めとする日本語諸方言とオーストロネシア語の比較研究を進めていくことが考えられる。

#### 【注】

1. 佐々木(2003: 240) 図 5-3 において、ティル式背負籠分布圏は、トカラ列島以南と見なしている。ここでは、アイヌ文化・伊豆諸島文化は視野に入れていない。
2. 頭がけ背負い運搬具が共通しているにもかかわらず、伊豆諸島の民具呼称に関して、現段階においては、タル(タラ) tar・ティル(テール) tiru との類似性が見い出せていない。
3. 川本(1978: 291)では、南島祖語(原始オーストロネシア語)として \*Rariŋ を挙げている。R は喉の奥で発音する摩擦的な r のことで、y と同じ音を表す。

#### 【参考文献】

- 泉井久之助(1975)『マライ=ポリネシア諸語—比較と系統—』弘文堂  
川本崇雄(1978)『南から来た日本語』三省堂  
国立国語研究所(1950)『国立国語研究所報告 1 八丈島の言語調査』秀英出版  
崎山理(1974)『南島語研究の諸問題』弘文堂  
佐々木高明(2003)『南からの日本文化(上)—新・海上の道—』NHK ブックス  
下野敏見(1994)『日本列島の比較民俗学』吉川弘文館  
小学館国語辞編集部編(2001)『日本国語大辞典 第二版』第二巻 小学館  
尚学図書編(1989)『日本方言大辞典上・下巻』小学館  
田村すず子(1983)『アイヌ語基礎語彙』早稲田大学語学教育研究所  
知里真志保(1975)『知里真志保著作集別巻 I・II』平凡社  
東条操編(1951)『全国方言辞典』東京堂  
仲原善忠・外間守善(1967)『おもろさうし辞典総索引』角川書店  
中本正智(1990)『日本列島言語史の研究』大修館書店  
橋尾直和(2002a)「高知県物部村市宇月谷方言における可能助動詞「サル」に関する覚書」  
『四万十・流域圏学会誌』第 1 巻第 1 号 四万十・流域圏学会誌  
——編著(2002b)『消滅に瀕した高知県限界集落の言語・民俗 I』環太平洋の「消滅に  
瀕した言語」にかんする緊急調査研究事務局  
——編著(2003)『消滅に瀕した高知県限界集落の言語・民俗 II』環太平洋の「消滅に  
瀕した言語」にかんする緊急調査研究事務局



- (2004)「古層語可能助動詞「サル」に関する考察－琉球方言と土佐方言の比較に基づいて－」(『沖縄学』第7号) 沖縄学研究所
- 服部四郎編(1964)『アイヌ語方言辞典』岩波書店
- 埴原和郎(1993)「日本人集団の形成－二重構造モデル－」(埴原和郎編『日本人と日本語の形成』朝倉書店
- 平山輝男・大島一郎・中本正智(1966)『琉球方言の総合的研究』明治書院
- 宮良當壯(1926)『採訪南島語彙稿』(『宮良當壯全集7』1980) 第一書房
- 村山七郎(1982)『琉球語の秘密』筑摩書房
- (1992)『アイヌ語の起源』三一書房
- (1993)『アイヌ語の研究』三一書房
- (1995)『日本語の比較研究』三一書房
- Batchelor, J (1938) An Ainu-English-Japanese Dictionary. Tokyo
- Dahl, O.Chr (1977) Proto-Austronesian. Lund
- Dempwolff, O. (1934) Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes. I. Band. Berlin, Hamburg
- (1937) Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes. II. Band. Berlin, Hamburg
- (1938) Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes. III. Band. Berlin, Hamburg
- Ferrell, R. (1969) Taiwan Aboriginal Groups: Problems in Cultural and Linguistic Classification. Taipei
- Gjerdman, O. (1926) Word-parallels between a Ainu and other languages. LE MONDE ORIENTAL, vol. XX
- Tsuchida, Sh. (1977) Reconstruction of Proto-Tsouic Phonology. Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa. Tokyo
- Wurm, S.A and Wilson, B (1975) English Finderlist of Reconstructions in Austronesian Languages (Post-Brndstetter). Canberra